様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３１７８

研究課題名（和文）MANGA＜スタイル＞の海外への伝播と変容

研究課題名（英文）Manga 'Style': Spread Abroad and Transfiguration

研究代表者
藤本　由香里（FUJIMOTO, YUKARI）

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：５０５１５９３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間中に北米各地、アルゼンチン、北欧・東欧・ロシア、その他欧州、東南アジア、東アジア、中東…計22の国と地域を調査。またローマ・上海・バンコク等８都市で図像アンケート・集計を行った。
最終年度に、①ストックホルム国際コミック祭で「コミックとMangaの間」②ストックホルム大学での3日間の国際学会"Manga, Comics and Japan: Area Studies as Media Studies"　③明治大学でヨーロッパとアメリカから作家を招いての国際シンポジウム、④藤本・伊藤・夏目・ベルント・椎名・レナトによるまとめの研究発表と共同討議、計4回の国際会議を開催。研究を締めくくった.

研究成果の学術的意義や社会的意義
海外ではここ10年の間に、単に日本マンガの翻訳作品を出版するだけではなく、日本マンガの形式（MANGAスタイル）を模しつつ、これを現地の作家が独自に変化させて描いたマンガ作品の存在が知られるようになってきた。本研究では，これらの独特な「MANGAスタイル」の作品群が生まれるに至った経緯やその過程、国や地域ごとに違う特徴、現地での認識のされ方等に着目し、これまで断片的にしか語られてこなかった「MANGA＜スタイル＞の海外への伝播と変容」の詳細を明らかにすることを目的とし、当初の目標をほぼ達成した。その過程で日本でも当該の作家たちを招いた特別講義や国際シンポを複数回行うなど、一般にも成果を示した。

研究成果の概要（英文）：During the project period 22 countries were investigated in situ (North America, Argentina, Northern and Eastern Europe, Southeast Asia, East Asia, Middle East). In 8 cities (Rome, Shanghai, Bangkok etc.) a pictorial survey was conducted.
In the last year the project was concluded in the form of 4 international events: (1) Stockholm International Comics Festival “Between Comics and Manga”; (2) 3-day International Academic Conference at Stockholm University “Manga, Comics and Japan: Area Studies as Media Studies”; (3) symposium with European and American comics artists at Meiji University, Tokyo; (4) project members’ presentation of their research and mutual discussion (Fujimoto, Ito, Natsume, Berndt, Shiina, Rivera).

研究分野：マンガ研究

キーワード：マンガ　海外市場　文化の伝播　スタイル　表現論　海外マンガ　グラフィックノベル　読み方向

１．研究開始当初の背景

海外ではここ 10 年ほどの間に、単に日本マンガの翻訳作品を出版するだけではなく、日本マンガの形式（MANGA スタイル）を模しつつ、これを現地の作家が独自に変化させて描いたマンガ作品の存在が各国で知られるようになってきた。海外で MANGA の描き方を教える学校も増えてきている。これを受けて特に KADOKAWA が 2014 年頃から積極的に、日本マンガの描き方の技術の輸出を考えはじめ、台湾にマンガ学校を開いて現地の作家を育てる努力を始めていた。そしてまさに研究を開始した 2015 年には、*Global Manga: 'Japanese' Comics without Japan?* という英語論文集が Routledge から刊行されて話題になった。これは、このテーマに関する国際的な関心の広がりを示している。

２．研究の目的

本研究では、日本マンガの伝播によって各地でそれぞれ独特な「MANGA スタイル」の作品群が生まれるに至った経緯やその過程、国や地域ごとに違う特徴、現地での認識のされ方等に着目し、断片的にしか語られてこなかった「MANGA＜スタイル＞の海外への伝播と変容」の詳細を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

アメリカ各地・カナダ・アルゼンチン・イギリス・フランス・ベルギー・ドイツ・イタリア・フィンランド・ポーランド・ロシア・シンガポール・タイ・インドネシア・マレーシア・中国・韓国・台湾・香港・マカオ・アラブ首長国連邦、計 22 の国と地域を調査し、現状の観察、作者・関係者のインタビュー、海外でマンガを教える学校の授業見学・聞き取り調査等を行った。

特に、右開きの日本マンガが左開きの国に入っていき、その形を変容させていく過程、当初その国の本に合わせて左開きで出版されていたものが、右開きが主流になっていく過程については詳細な調査を行った。

各国の調査では、アメリカの調査に特に力を入れ、各地のコンベンションに参加。ベン・ダンやスタン・サカイといった初期の作家にインタビューするとともに、アニメが輸入されてマンガに影響を与えていった過程についても、複数の関係者への詳しいインタビューを行った。

また、東京、ローマ、フィレンツェ、北京、上海、バンコク、ジャカルタなど 7 都市で、10～20 代を中心に図像アンケートを実施し、各地でどういう作品が「MANGA スタイル」とみなされているのかを探った。

一方で、「日本マンガ／まんが／漫画」「海外マンガ／まんが／漫画」を巡る日本国内の言説を調査し、日本の中にある「日本マンガの固有性」という思い込みの起源を探った。

また、海外の学会にも積極的に参加し発表する中で、海外の学者との意見交換を頻繁に行った。日本国内でも、ヨーロッパやアメリカで日本マンガに影響を受け、「MANGA」を標榜する作家たちを招いて話を聞く特別講義やシンポジウムを複数回開催した。

特に最終年度は、ストックホルムで 2 回、明治大学で 2 回、計 4 回の国際会議を開催し、海外あるいは日本で、この問題に対する理解を深め、共有することにつとめた。具体的には、

① ストックホルム国際コミック祭で「コミックと Manga の間」の国際イベントを開催
② ストックホルム大学での 3 日間の国際学会"Manga, Comics and Japan: Area Studies as Media Studies" を開催し、同大学 HP 上に公開すると同時に、冊子としても出版した。
③ 明治大学で、ヨーロッパ（フランス・スペイン）およびアメリカで活躍する作家を招いての国際シンポジウムを開催
④ 最終報告会として藤本・伊藤・夏目・ベルント・椎名・ルスカによるまとめの研究発表と共同討議をおこなった（③④は、ミネルヴァ書房で出版を検討中）。

４．研究成果

（１）はじめに：MANGA＜スタイル＞とは何か？

逆説的だが、具体的に研究を始めて最初に明らかになったのは、「MANGA＜スタイル＞とは何か？」を定義することはきわめて難しく、見極めは慎重に行わねばならないということである。現地で MANGA と呼ばれていても、日本人が見るとマンガに見えないものもある。逆に、こちらが「あ、これはマンガの影響が…」と思っても、まったく無関係の場合もある。

たとえばインドネシアの 1960 年代の作品は劇画によく似ているのだが、この時期にはまだインドネシアに日本マンガは入っておらず、むしろインドネシアも日本も、この時期にアメコミの絵柄を取り入れた結果、似た作品ができたものと思われる。

あるいはフィンランドの同人誌で、これは日本マンガと西洋風のコミックのフュージョン？と思えた作品も、作者に聞いてみると、日本マンガから直接影響を受けたわけではなく、フュージョン風の作品をネットで見て、自分の絵柄に取り入れたのだという。そうした間接的な影響の場合もあり、日本マンガから直接影響を受けているとは限らない。

加えて、MANGA には MANWA（韓国）も MANHUA（台湾・中国）も交じっている。

逆に、1960 年代に発令された漫画審査制度のため、国内のマンガ家たちがいっせいに日本マンガの真似描きに走り、それが 80 年代末まで続いた台湾のように、明確な影響関係が確認できたケースもあった。台湾のマンガが今でも日本マンガと見分けがつかないほど似ているのは、ちょうど日本マンガの技術の基礎ができあがっていった 60～80 年代に、台湾のマンガ家たちが

それをリアルタイムで吸収していったからだと考えられる。
　このように定義が難しい「MANGA＜スタイル＞」だが、一方で確かに、日本マンガが新奇なものとして入ってきた欧米を中心に、“MANGA”という文脈で売られる「市場」は世界各国に広く存在する。日本のマンガが翻訳されて人気になり、市場ができた結果、（日本）MANGA ファンに向かって“MANGA”という文脈で売られる、その国の作家が描いたオリジナル作品のラインである。この場合“MANGA”は、一種のマーケティング用語であるといえる。これらを踏まえ、＜スタイル＞そのものに注目するよりも、各国での「市場」「マーケティング用語」としての“MANGA”に注目する方が対象の輪郭がはっきりして有効である、と考えるにいたった。
　しかし一方で、MANGA に影響を受けた作品が BD（フランスを中心としたヨーロッパのマンガ。大判・ハードカバーが一般的）の形で出版される、ということもあり得るし、タイでは、「マンガは回転が速いと思われているから、MANGA の文脈で出版すると売ってくれるサイクルが短くなる。だから Graphic Novel として売ってもらう方がよい」というアーティストもいた。
　いずれにせよ、「MANGA＜スタイル＞」を考える際には、こちらでそれを判断するのでなく、現地で何が MANGA とみなされているか、実際の作者はどう考えているのか、に立脚することがきわめて重要である。
　コンベンションその他での調査を通じて 70～80 人の海外作家に「あなたにとって MANGA＜スタイル＞とはなにか？　その特徴とは？」というインタビューを行ったが、総じてその答えは、①絵柄、②演出技術あるいはその効果（日本マンガには「感情を巻き込まれる」という答えが目立つ）に焦点を当てるもの、の二つに分かれる。

（２）図像アンケート

　現地で何が MANGA とみなされているか、を知る一助として、東京、ローマ、フィレンツェ、北京、上海、バンコク、ジャカルタなどの 10～20 代中心にした図像アンケートを行った（10～20 代・計 500 人、30～40 代・計 82 人、総計 582 人）。具体的には、日本のマンガ、アニメの代表作２作品に加え、41 点の男女の顔を中心にした図像を並べ、それを「日本マンガ」だと考えるかどうかを５段階評価で問う調査である（夏目が担当）。
　結果としては、日本と海外を問わず、代表作回答の上位 3 位までの共通性が高く、『ONE PIECE』『ドラゴンボール』『NARUTO』など「週刊少年ジャンプ」作品が上位を占めた。世界共通で「日本マンガ」が「ジャンプ」（少年マンガ）中心＋少女マンガ、アニメ絵でイメージされていることがわかる。時代で区分すると、大雑把に 80 年代以降の作品群から類型的な様式イメージを得ている。また、欧米作品より東アジアの作品がより「日本マンガ」に近いと判断された。
　「日本マンガ」イメージは、特定の時代の、一部の傾向に偏向しており、これをもって日本マンガの一般的な様式、手法の実態とみなすことはできない。ただ、日本マンガを一部の絵柄のイメージで代替させる、ほぼ共通する一般的なイメージ＝ステロタイプとしての「日本マンガ・スタイル」が存在することは指摘できる。

（３）マンガ学校調査

　調査の過程で、各国にあるマンガ学校、具体的にはイタリア（ローマ、ルッカ）、フランス（パリ、アングレーム、トゥルーズ）、台湾（角川マンガ学校）、タイ（角川マンガ学校、ランシット大学アート・デザイン学部）、インドネシア（ジャカルタ）、アメリカを拠点にする美大 SCAD（Savannah College of Art & Design）のアトランタ校と香港校の調査を行った。
　イタリアなどでは、アメコミ・BD（ヨーロッパのマンガ）・フメット（イタリアンコミックス）・そして MANGA とコースを分けて教えている学校もある。全体では、「MANGA」に特化した専門学校もあれば、スタイルや市場を分けず、シークエンシャル・アート（Sequential Art：連続芸術）として教えている SCAD のような美大もある。総じて MANGA を教える学校は、お習い事としてとしての街のマンガ学校から美大まであり、それぞれ役割が違う。当然かもしれないが、MANGA だけではなく、映像科やデザイン科の学生と共に、映像理論やデザインの基礎、美学など、美術の基礎から学び、そこから専門に分かれていく美大の方が作品のレベルは高い傾向にあった。だが一方で、「お習い事」からはじめる街の MANGA 学校からプロになる学生が複数出るケースも少なくない。ローマの国際コミック学校講師の山根緑氏からは、長年の経験からみえてきたヨーロッパのマンガと日本のマンガの演出方法の違いについても具体的に話を聞いた。
　これらの主な調査内容については藤本が大手前大学で行われた国際学会で発表を行い、その内容は書籍として、2019 年 7 月刊行予定である。

（４）読み方向による変容

　日本のマンガは右開きであるが、多くの国では左開きである。日本マンガを翻訳する際、欧米では当初は主に逆版＝裏焼きで印刷することで左開きにしてきたが（フランスではコマの入れ替えによって対処する例もあった）、ある時期から日本と同じ右開きで出版することが主流となっていった。この過程を詳しく調査し、この変化のほぼ基本的な全容が明らかになった。
　ヨーロッパで日本マンガの翻訳出版に火がついたのは、1992 年にスペインで『ドラゴンボール』が出版されたのが嚆矢だと考えられるが、薄い大判のアメコミ風・左開き・逆版の出版で、しかもオノマトペも逆版（鏡文字）になったままで出版された。このためか、次にドイツから版権の申し込みがあった時、作者・鳥山明氏の意向で「右開きなら出版を許す」と回答し、そ

れが受け入れられたのが、左開きの国での最初の右開き出版である。この新奇な出版形式は当初かなり苦戦したが、やがて大ヒットとなった（当時、決断をくだしたドイツの編集者にも詳しいインタビューを行った）。

左開きの時代のアメリカでも、『ドラゴンボール』だけは作者の意向で右開き出版されている。アメリカで右開きが本格的になるのは、2002 年に Tokyo Pop が“Authentic Manga Line”と銘打って日本マンガの翻訳を右開きでオノマトペを翻訳しないまま安い値段で書店で売る、という決断をしてからだが、この裏にはアメリカを代表する書店チェーンの一つ、ボーダーズのカート・ハスラーの助言があったことが知られている。今回の調査で、もともとは赤松健氏ら講談社の作家の何人かから「右開きで出したい」という打診があり、困った Tokyo Pop がハスラー氏に相談した結果だ、ということが明らかになった。また、Tokyo Pop の社長スチュアート・リービは、ドイツで右開きが成功したことを知っていた（メールインタビュー）。

ちなみにフランスでは、90 年代半ば頃からトンカムが徐々に右開き出版を始めていたが、最後に残った大手出版社のグレナを含めて右開きに移行したのは 2003 年である。きっかけは『One Piece』の尾田栄一郎氏がフランスを訪れた際、自分の本は右開きで出してほしいと強く希望したからだという。ただしフランスは左開きの『ドラゴンボール』を今でも出し続けている世界でも稀な国となっている（データを入手したが、左開きの方が売れ行きは良い）。

こうして日本マンガの翻訳が右開きのままで出版されることが定着した結果、左開きが基本のはずのドイツやフランスなどでは、自国の作家が描いたオリジナルの MANGA（風）作品も右開きで出版するケースが増えてきている。たとえば、NHK でアニメ化され、この秋からアニメ第２期も予定されているトニー・ヴァレント『ラディアン』は、フランスで出た原作も右開きで、日本マンガの判型に近い形で出版されている。トニー・ヴァレントは、右開きで描く方がタテの動きを描きやすく、吹き出しも横長だと視線の動きを阻害するので縦長の方がいい、とも語っている（明治大学での特別講義・国際シンポジウム、『ラディアン』８巻あとがき参照）。

一方、中国では、海賊版時代に、裏焼きはせず、左右のページを入れ替えるだけ、しかも４ｐを 1p にまとめて出版するというきわめて特異な方法で日本マンガの出版が行われており、この「４拼１」の形式がその後、中国オリジナルのマンガ雑誌の基本出版形式となった。この方法だとストーリーは追えるものの、原作では意識的に作られている見開きの効果や、いわゆる「視線誘導」等、演出上の効果は失われてしまうことが多い。現在、中国では数年前からすさまじい勢いで Web 配信・縦スクロールで読むマンガが紙媒体のマンガにとってかわり、日本マンガを駆逐する勢いだが、その背景には、そもそも「見開きや読んでいく方向を考慮した演出効果」があまり重視されてこなかったこともあるのではないかと考えられる。

（５）マンガの技法をめぐって

「視線誘導」については、最終報告会で伊藤剛が精緻な分析を行った。また、伊藤が監修を務めた『描く！マンガ展』は、「名作を生む画技に迫る―描線・コマ・キャラ」とサブタイトルがつけられている通り、マンガを「描く」技術に注目した展覧会であり、2015 年の大分県立美術館を皮切りに 2017 年まで全国を巡回した。この展覧会は「MANGA<スタイル>」を考える上でも重要な展覧会である。また伊藤は、2019 年 5～8 月まで開催されている大英博物館の日本マンガ展「The City Exhibition Manga」のアドバイザーも務めた。

（６）国際学会・国際シンポジウム開催

先述したように、最終年度には、ストックホルムで 2 回、東京で 2 回、計 4 回の国際会議を行った。また、それに先立ち、2015 年には『ラディアン』の作者トニー・ヴァレント氏を、16 年にはヴァスティアン・ヴィヴェス氏をはじめとする『ラストマン』の作家チーム 3 人を海外マンガフェスタの協力でフランスから招いて明治大学で大学院特別講義を行い、その後のインタビューも行った。海外マンガフェスタの実行委員長であり「ユーロマンガ」編集長であるフレデリック・トゥルモンド氏には一貫して研究協力者としてご尽力いただいた。同氏の監修で、2016 年のパリのジャパン・エキスポでは、「French Touch」と題して、日本マンガに強い影響を受けたフランス人作家の作品をまとめて展示・紹介するとともに、日本のアニメスタジオと共同して働くフランス人アニメーターによる日本アニメの制作法の展示解説なども行われた。

また、2017 年には藤本が外務省の主催する「国際漫画賞」10 周年記念イベントの司会・コーディネートを務め、ケン・ニイムラ、フレデリック・ショット、吉田さをり、倉田よしみ各氏とともに、国際的な視点で捉えた時の海外で描かれる MANGA の位置づけについて討論した。

最も重要なのは、①ストックホルム大学で行われた 3 日間の国際学会"Manga,Comics and Japan: Area Studies as Media Studies"である。ベルントが主催とコーディネートにあたったが、研究を進めるにあたっては、内外の視点のすり合わせ、方法論のすり合わせが不可欠であるという強い認識に基づいた本学会では、日欧亜の研究者が参集し、各国から様々な視点で報告がなされ、非常に充実した実り多い学会となった。ここでなされた発表は(一部間に合わなかった論文もあるが)、同大学 HP 上に公開すると同時に、冊子としても出版した。

ベルントはこれ以外にも多くの国際学会で発表し、多くの学者たちと意見交換することで、海外研究者の間での MANGA 概念の更新や、コミックスタディーズとの接続に努めている。

また 2018 年秋には明治大学で、「ヨーロッパ編」としてケニー・ルイス（スペイン）、トニー・ヴァラント（フランス）、そして『ユーロマンガ』編集長のフレデリック・トゥルモンドを迎え、

「アメリカ編（日米マンガ交流史）」としてアメコミに詳しいマンガ家の内藤泰弘氏と翻訳家の堺三保氏、そしてアイズナー賞５冠を達成したアメリカの『Monstress』のアーティスト、タケダ・サナ氏を招いて、作家の視点から MANGA＜スタイル＞を考える国際シンポジウムを行った。そして 2019 年 3 月には、同じく明治大学で、各研究の最終報告会を行った。具体的な発表テーマについては、本報告書末尾の「学会発表」を参照されたい。この最終報告は国際シンポジウムの記録と併せ、ミネルヴァ書房で出版を検討中である。

（７）アメリカにおけるアニメ輸入の歴史、その他

初期（70 年代）の日本アニメの輸入史とマンガとの接続について、アーティストの Steve Bennet、Ben Dunn、Stan Sakai,研究者・記者 Fred Patten、アニメーション歴史学者 Jerry Beck 各氏にインタビュー調査を行い、その成果を研究協力者のレナト・リベラ・ルスカが、2018 年に青山学院大学で開催された「Mutual Images」シンポジウムおよび最終報告会で発表を行った。

レナトによれば、すでにヨーロッパでは「現地のアーティスト達が十分にマンガスタイルを再現でき、その上で自作コンテンツをいかに展開できるかという方針に移行している」という。

これらの研究成果は、一部『Mutual Images』の論文集にも掲載される予定である。

（８）日本国内のマンガ観の変容

「日本マンガ／まんが／漫画」「海外マンガ／まんが／漫画」を巡る日本国内の言説を調査した結果（椎名担当）、日本国内において「日本マンガには固有性がある」との認識が広まるのは 70 年代以降であり、それまでは海外からの影響が語られることも多く、日本マンガ全体として「固有性がある」とは考えられていなかったことが明らかになった。

「日本マンガには固有性がある」という認識に至った主な要因は以下の３つである。

①手塚を「ストーリーマンガ」の「起源」とし、それこそが日本の発明であるとされた結果、「映画的手法」等、日本マンガの独自性はその演出法にこそあると考えられるようになった。

②大人マンガが排除され、「ストーリーマンガ　マンガ」観が成立したがために、「手塚起源説」のもとでは、手塚作品で「発明」された「演出法」が「ストーリーマンガ」という 1 ジャンルの固有性ではなく、日本マンガ全体の表現の固有性だとするすり替えが行われた。

③評論家、マンガ家の世代交代、先行世代への反発、等々により海外マンガに対する言及が減少し、結果として比較することなく日本マンガの固有性について語ることになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 47 件）

・ジャクリーヌ・ベルント：“ **Anime in Academia: Representative Object, Media Form, and Japanese Studies** ” ***Arts 7*, 2018, pp1-13**　【査読あり】

・椎名ゆかり：『“ 日本産 ”でない **ANIME** や **MANGA** の増加を「歓迎すべき」理由」『**Courrier Japon**』**2018** 年。

・藤本由香里：「東南アジアマンガ紀行～マレーシア編」『**AIDE** 新聞（コミックマーケットカタログ **C92**）』**2017** 年、**pp. 1292-1299**

・ジャクリーヌ・ベルント “ **Reflections: Writing History into Art History in Contemporary Japan**” ***Konsthistorisk Tidskrift/Swedish Journal*, 2016**、**pp.1-8**　【査読あり】

……他 **43** 件

［学会発表］（計 **79** 件）

★「**MANGA**＜スタイル＞の海外への伝播と変容」最終報告会

＊はじめに：“ **MANGA** スタイル ” 概観（研究代表者：藤本由香里）

＊翻訳日本マンガの読み方向とその影響（藤本由香里）

＊ “ 視線誘導 ” から考えるマンガと日本スタイル（伊藤剛）

＊図像アンケートによる「マンガ・スタイル」の比較検討～中国・タイ・インドネシア・イタリア・日本（夏目房之介）

＊アニメ輸入が海外の「マンガ・スタイル」に与えた影響（レナト・リベラ・ルスカ）

＊「マンガ・スタイル」の概念的・表現的範囲～欧州の **gaijin mangaka** にとっての『マンガ』を例に（ジャクリーヌ・ベルント）

＊日本国内におけるマンガ観の変遷とその国際性（椎名ゆかり）

・藤本由香里：The impotance of “educational comics” in Asia: Another genre in manga style（**Manga, Comics, and Japan: Area Studies as Media Studies**、ストックホルム大学、**2018**）

・ジャクリーヌ・ベルント：“ Shōjo and kyara: From Representation to Mediation” （ ドイツ・チュービンゲン大学メディア学科での国際セミナー『キャラ論』、**2018** 年）

・藤本由香里：**The Reading Direction of Translated Japanese Manga and its Effects**（**Pacific Ancient and Modern Language Association (PAMLA)**、**2017** 年）

……他 **6９**件

〔図書〕（計１３件）

・ジャクリーヌ・ベルント編著【**開催学会論文集**】：“ Manga, Comics, and Japan: Area Studies as Media Studies, ” *Orientaliska Studier no.156*,ストックホルム大学出版会,2019 年 総 234p

・藤本由香里「世界の『マンガを教える学校』をめぐって」『大手前大学比較文化研究叢書 15 なぜ学校でマンガを教えるのか』水星社所収、2019 年。pp.13－48, 171－197
・ジャクリーヌ・ベルント：Chapter 8 “Manga, which Manga? Publication Formats, Genres, Users,” in *Japanese Civilization in the 21st Century*, New York: Nova Science Publishers, ed. Andrew Targowski, Juri Abe, Hisanori Katō, 2016, pp. 121-133.
・ジャクリーヌ・ベルント：編著 “Introduction: Manga beyond Critique?” Special Issue “Manga Culture and Critique,” *Kritika Kultura, a refereed electronic journal of literary/cultural and language studies*, Ateneo de Manila University, March 2016, pp.166-178. http://journals.ateneo.edu/ojs/kk/article/view/2243
・伊藤剛「目のひかりからコマへ」鈴木雅夫・中田健太郎編『マンガ視覚文化論』2016 年
・夏目房之介「「表現論」から二十年 マンガと近代について考えること」鈴木雅夫・中田健太郎編『マンガ視覚文化論』2016 年
・伊藤剛・田中圭一・ヤマダトモコ・三輪健太朗 共編著『描く！マンガ展』図録、大分県立美術館、2015 年。総 80p

……他 7 件

〔その他〕ホームページ等
Manga, Comics, and Japan: Area Studies as Media Studies, ”Orientaliska Studier no. 156, 2018 年 12 月発行; Open Access.（同タイトルで開催した国際学会・成果論文集）
https://orientaliskastudier.se/okategoriserade-en/156/

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：夏目房之介
ローマ字氏名：**Fusanosuke NATSUME**
所属研究機関名：学習院大学
部局名：大学院身体表象コース
職名：教授
研究者番号（8 桁）：**70351301**

研究分担者氏名：ジャクリーヌ・ベルント
ローマ字氏名：Jaqueline BERNDT
所属研究機関名：京都精華大学(ストックホルム大学教授)
部局名：マンガ学部
職名：講師
研究者番号（8 桁）：00241159

研究分担者氏名：伊藤剛
ローマ字氏名：Tsuyoshi ITO
所属研究機関名： 東京工芸大学
部局名： 芸術学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：30551519

研究分担者氏名：椎名ゆかり
ローマ字氏名：Yukari SHIINA
所属研究機関名：東京藝術大学
部局名：大学院映像研究科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：10727796

(2)研究協力者
研究協力者氏名：レナト・リベラ・ルスカ
ローマ字氏名：Renato Rivera Rusca

研究協力者氏名：
フレデリック・トゥルモンド
ローマ字氏名： Frederic Toutlemonde

……他,多数の方にご協力いただきました。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。